

谷順一作 「いやされた父」

谷順一ナレーション 父は病院勤めの医者で、クリスチャンでしたが、外来の患者を診るだけでなく、いろいろなことを研究したり、翻訳の仕事をしたり、忙しい病院生活を送っていました。そのようなたくさんの方が、いつしか父を教会から遠ざけ、聖書を読む時間もなくなっていました。その父に、ある日、思いもよらないことが起こったのです。去年の3月のこと――。

順一 お母さん、ただいま。

母 お帰り。

順一 どうしたの？ そんな深刻な顔してさ。

母 実はね、大変なことになったの。

順一 大変なこと？

母 お父さんがね、肋膜炎で入院することになったの。

順一 え？ そりゃあ大変だ。でも、お父さん、働きすぎだからな。ちょうど体を休めるにはいいかもしれないよ。

母 そうね。きっと神様が休息を与えてくれたのね。

順一 そうだよ。仕事のために教会にも行かないし、聖書だって読む暇もないんだもん。あれじゃあクリスチャンとしてちょっと良くないと思うな。

母 そのとおりね。でも、ひどくならなければいいんだけど…。

ナレーション こうして父は、自分の勤めている病院に入院することになりました。ところが、だれもがすぐに治ると思っていた父の病気は、だんだんひどくなっていったのです。そしてある日のこと、母は主治医の先生に呼ばれました。

母 先生、あの、主人の病気はどうなんでしょう？

主治医 ええ、そのことで今日はお呼びしたのですが…。

母 まだかなりかかるのですか？

主治医 たぶんそうだと思います。実は…、大変申し上げにくいのですが…。

母 構いません。どうぞおっしゃってください。

主治医 最初は肋膜炎だったのですが、どこがどうこじれたのか、どうもがんの疑いがあるのです。

母 がんですって？

主治医 ええ。今週の検査の結果では、はっきりとがんの症状が現れているのです。

母 それを主人は知っているのでしょうか？

主治医 分からないと思います。まあ我々も、谷さんにはがんだとは知らせませんし、薬なども谷さんには分からないようにうまくやりますので、奥さんも、このことは谷さんに言わないでください。

母 はい。

ナレーション 母は、大きな動揺を抑えながら、家に帰ってきましたが、僕がこのことを知った時、一瞬、父にがんだということを知らせたほうがいいのではないかと思いました。それは、クリスチャンなんだから、がんだと告げても失望せずに、信仰者として立派に生きていけるだろうと思ったからです。しかし、次の瞬間、この“がん”という言葉が急に現実のものとなって、まるで死の宣告のように響いてきました。

主治医 (エコー)ご主人は、がんです。

順一 (エコー)父が、父が、死ぬ?!

ナレーション 小さいころ、一緒に遊んでくれた父の顔が思い出されました。僕は、こみ上げる涙を抑えながら、祈りました。

順一 (祈り)神様、あなたはなぜ父をがんになさったのですか？ 父は医者として、多くの患者を治し、これから先も、もっともっと多くの患者を助けるでしょうに…。しかし、僕は、このことに必ず神様のみ心があると信じています。あなたのみ心が成らなければ、この地上で死ぬということは絶対ないことを信じています。神様、どうぞ父をいやしてください。お願いします！

ナレーション 僕は、来る日も来る日も祈りました。教会でも、牧師先生をはじめ多くの方々が祈り、励ましてくれました。

伊藤 谷、神様がついてるんだ。頑張れよ。

石井 (祈り)天の父よ。谷君のお父さんをいやしてください。

須内 谷さん、元気を出して！ 神様は最善以下のことはなさらないのよ！

ナレーション しかし、父の病気はますます悪化し、40度の熱が3日間も続いて、呼吸が困難になって、酸素マスクを着けたこともありました。

そんなある日、僕は父のところに見舞いに行きました。

順一 お父さん。

父 やあ順一か。

順一 どう、体のほうは？

父 うん、まあまあだ。

順一 でも苦しそうじゃない。

父 大丈夫だよ。それより順一、ちょうどいい機会だからお前に話しておくがな。まあそこに座れ。

順一 何？

父 クリスマンというものはな、口先だけで「クリスマンだ、クリスマンだ」と言ってもダメだぞ。行いがなければダメだ。むしろ、「クリスマンだ」と言わないで、行動するんだ。そしてほかの人がそれを見て、「おや、この人はどこか違うぞ」と思ったらしめたものだ。そんなとき、伝道するチャンスが与えられるんじゃないかと思うよ。

順一 そうだね。聖書にだって、「行いのない信仰は死んだも同じだ」って書いてあるもんね。

父 お父さんなんか、あんまり丁寧に診てやるもんだから、患者さんが増えちゃって増えちゃって大変だよ。今、お父さんがこうして休んでたって、「谷先生じゃなきゃイヤだ」と言う患者さんがたくさんいるんだぞ。

順一 そうだね。今の医者は、金もうけのために患者を物のように扱うからね。お父さんのような医者に集中して集まるのも分かる気がするな。

父 いったったか、患者さんに「谷先生は、もしかしたらクリスマンではないのですか？」と言われたことがあったが、お父さんには、それがとってうれしかったよ。

ナレーション 僕は、ふと、父が自分の病気のことを知っていて、遺言のつもりで言ったのではないかと思いました。そして、父の生き方の中には、クリスマンとしての筋金が通っていたんだと知って、この時初めて父を誇らしげに思えたのでした。

多くの人々の祈りの中で、父の病はやっと生死の峠を越えました。それ以来、父は日増しに

良くなっていき、がんと言っても普通の人と変わりなく何でもできるようになったので、退院し、家で静養することになりました。そんなある日、母はまた主治医の先生に呼ばれて行きました。

主治医 ああ奥さん。まあお座りください。

母 主人の病状はどうなんでしょうか？

主治医 はあ、それが…。

母 悪いのでしょうか？

主治医 いえ、その、大変不思議なことなのですが…。

母 と申しますと？

主治医 ええ、がんの影が消えているのです。それなりの薬はたくさん使いましたが、こない早く消えてしまうなんて、ほんとに不思議ですな。これは医学上から見ても、奇跡としか考えられませんな。

母 そうですか！ ありがとうございます。

主治医 いやいや、私どもは医者としてやるべきことをやっただけです。それにしても谷さんの根気強さには驚きましたよ。その根気強さが谷さんを救ったんですな。普通の人なら、もう死んでいたかもしれませんよ。

母 そうですか。それにしても不思議ですわね。

主治医 谷さんは、確かクリスチャンではありませんでしたか？

母 ええ、そうですが…。

主治医 やはり信仰の力はすごいんですなあ。恐れ入りました。

母 先生、でも、主人の信仰もそうかもしれませんが、この背後には多くの人の祈りがあったのです。その祈りこそ、主人の病気を救ったんだと思いますわ。

主治医 祈り…ねえ。わたしどもには奇跡としか思えないのですが。

ナレーション 僕は、母から、父のがんが消えてしまったことを聞いた時、思わず、神様の力の偉大さに圧倒されてしまいました。しばらくは、祈りが言葉にならなかったのです。ただ心の中で、「主は生きておられる。主は祈りを聞いてくださる」と叫び続けていたのです。

父は今、家で翻訳の仕事をしています。もうすぐ父は、病院に、患者としてではなく、医者として復帰できる予定です。多くの患者が、父を待っているのです。

聖書の言葉 信仰による祈りは、病む人を回復させます。主はその人を立たせてくださいます。また、もしその人が罪を犯していたなら、その罪は赦されます。（ヤコブの手紙 5:15）

<完>